

持続の深さについて

ベルクソンにおける持続の評価

長谷川暁人(岐阜大学)

ベルクソンは『意識の直接与件』において、持続を「現在の状態とそれに先行する諸状態との間に区別を持ち込むことを控えるときに、私たちの意識の諸状態の継起がとる状態」であると定義する。こうした、いわば途切れのない純粋性というテーゼは、例えば西田幾多郎の純粋経験にも見られるものである。同じく純粋経験という概念を自らの心身論・認識論の出発点とするウィリアム・ジェイムズにおいても、直接的な生の流れという形で、その経験の純粋性が語られている。

しかし、こうした意識の純粋な状態をどのように評価するか、という点において、ベルクソンの著作はその態度を明確にしていらないように思われる。この点については、前述の西田が純粋経験を明らかに肯定的に捉え、他方でジェイムズが単なる意識のありのままの根本状態として価値中立的に述べているのと対照的であると言える。

本論は、このベルクソンの純粋持続について、ベルクソンがどのような評価を与えていたのかを検討する。結論を述べると、おそらくベルクソンは年代を経るごとに、持続に対し肯定的な評価を与えるようになっていった、というのが正しい解釈であろう。『意識の直接与件』では中心的な概念ではあったものの、持続は単に意識の本来的な状態である、と述べられていたに過ぎなかったが、『物質と記憶』を経て『創造的進化』に至る頃には、ベルクソンにおいて持続は私たちの存在の源であり、常にそこに立ち返るべき規範となっていたように思われる。こうした傾向はとりわけ『思考と動くもの』に顕著で、そこでは持続の相の下にすべてを見る、というテーゼが掲げられている。

こうしたベルクソンの変化、あるいは深化は何に起因するものであろうか。一番大きな原因は、ベルクソン哲学において持続という概念が担う役割が大きく、そして多岐にわたるようになっていったことであろう。他方で、ベルクソン哲学そのものの方針は一貫しているのだから、私たちはこうした持続に対するベルクソンの態度を丹念に追うことで、持続そのものにいくつかの段階を見出すことができるはずである。それは、いわば持続の深まり、深度の変化として捉えられるだろう。

そして、こうして取り出された持続のいくつかの段階は、実際に人が取りうる意識の状態として、『物質と記憶』に描かれている円錐図のある平面に位置づけることができるであろう。しかし、それは単なる水準の違いではなく、ある一定の面における深さの差異として考えられるはずである。